

(翻訳) 韓半島青銅器時代の性格に対する諸論議

李 盛周 *

訳：平郡 達哉 **

Discussions on the Characteristics of Bronze Age of the Korean Peninsula

Lee, Sung-Joo

(Translation : HIRAGORI Tatsuya)

キーワード：韓半島、青銅器時代、社会性格、社会変動、農耕社会

はじめに

韓国考古学の時代区分体系には青銅器時代が設定されており、この時代は新石器時代と鉄器時代の間に位置している。この時間の一場面を一つの時代に区分したのは社会・文化発展の一段階として意味づけるためであろう。そして、この時代に青銅器が生産、交換、使用、廃棄、奉獻、隠匿されたため、「青銅器時代」と名付けられたのであろう。しかしながら、韓半島青銅器時代の時間的範疇については十分に設定されていない。韓半島では青銅器時代の銅鉞山の開発、製錬・合金、鑄造など関わる証拠がほとんど無い。そして、使用・廃棄・奉獻・退蔵の行為がどのような意味と関係で構成されているのか明らかになっていないため、時代の名称が果たして適切なのかという疑問が提起される。また、青銅器を生産したり入手するために政治権力が作用する方式についてもよく知られておらず、青銅器が社会複合化といった変動にどの

ような役割を担ったのかについても不明である。したがって、韓半島青銅器時代の設定は妥当であるとは言い難く、付与された名称も適切であるとはいえない。

本稿の目的は時代区分に関する論争を目指すものではなく、既存の時代区分を否定することでもない。ただ、本稿では韓半島青銅器時代の変動が本質的にいかなるものであったのかという問題についての論議を試みるだけである。したがって、まず、いかなる根拠を以って青銅器時代が設定されたのか？そして、この時代の性格についていかに考えられてきたのか？この二つの質問に対する解釈を研究史から整理してみよう。次に、青銅器の生産・流通はユーラシア大陸全体におよぶ数千年間の拡散と受容の過程である。この過程を経て諸地域の土着社会が時期を異にして青銅器時代に入っていった。したがって、ある地域の青銅器時代を理解しようとすれば、世界史的な過程と土着社会の特徴を共に考慮しなければならない。韓半島の青銅遺物を生産

* 韓国国立慶北大学校考古人類学科, ** 島根大学法文学部社会文化学科

と使用、あるいは廃棄と奉獻の脈絡から調べてみた場合、それは果していかなる象徴性を持ち、社会文化変動といかに関連しているのかについて検討してみよう。さらに、この時期の広域におよぶ地域集団の分布とそれらの関係網に対する理解の方式についても検討してみる。韓半島の社会文化変動を理解するためには、それを巡る広域の相互作用の体系と歴史的な脈絡に対する理解も必要である。青銅器時代には遼東と韓半島において物質の様相が速いスピードで変化していった。このような変動の速度と様相が長期的な歴史過程においていかなる意味を持つのかという問題について検討してみよう。

1. 考古学史に対する検討：

青銅器か？ 農耕共同体か？

日帝強占期（訳者注：1910年～1945年の日本統治時代）における韓半島先史時代の時代区分体系は石器時代と金石併用時代に分けられた（李基星 2010）。研究者によって時代設定の趣旨は少しずつ異なっていたが、石器時代の次に、歴史時代へ移っていく中間段階としての金石併用時代を置くことは、当時の朝鮮考古学の論議において共通的な説明であったようである。当然、漢四郡設置以前と以後を分けようという努力もなく、漢族の侵略による植民地文化とみた点（藤田亮策 1937：17）は植民史観の反映といえる（李基星 2010：39-41）。しかし、当時正式に発掘調査された先史時代の遺構および共伴関係が確実な一括遺物がほとんどなかったという現実、そして遺物複合体の様相を厳密に定義し比較する学問的風土が定着していなかった学界の実状などを勘案して見る必要がある。

解放（訳者注：1945年）以後、金石併用

期説を棄て青銅器時代を設定したのは朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の学界であった。解放直後、北朝鮮の考古学研究者は先史時代の遺構に対する発掘調査作業と報告において先進的な能力と態度を示し、発掘調査における層序区分と共伴関係の把握を通して遺物複合体を体系的に定義しようとした。朝鮮民主主義人民共和国樹立10年目の年、解放後の考古学の発展状況を説明した鄭白雲の文章を見ると、1950年代における北朝鮮の考古学研究者の主な関心事が何であり、彼らにとって考古学の研究目標がいかなるものであったのかが分かる。

「解放後、我が国で考古学研究は実に新たな自らの道を開拓した。それ（訳者注：考古学研究）は20世紀初めに日本帝国主義の御用学者によって開始され独占された..（中略）..（訳者注：これを）清算して新たな道つまり科学的なマルクス・レーニン主義の方法論に立脚して研究事業を進めることになった。解放後、朝鮮考古学界では過去において意識的に関心が寄せられなかった原始時代の研究とその遺跡の発掘探査に主要力量を注いだ..（中略）..考古学研究の中心方向を日帝..（中略）..の誤った「学説」に対する再検討と人民の歴史の一部として我が国の原始社会史と原始社会から階級社会へ移行する過程に関する研究に置きつつ、新石器時代の編年問題と同時に青銅器時代の存在可否に関する問題に定めた。」（鄭白雲 1958：10）

つまり、北朝鮮考古学界が解放直後、最大の企画として定めた課題は日帝強占期に否定された新石器時代と青銅器時代を設定し、先史時代の体系を立てることであった。この課題が重点的に推進された1950年代の北朝鮮考古学界の調査と研究を先導していったのは都宥浩である。そして、その努力の大成が著

書『朝鮮原始考古学』(都宥浩 1960) であるとしても良いだろう。1950年代後半から60年代初めまで北朝鮮考古学の黄金期といえるこの時期の研究をリードした都宥浩によって新石器・青銅器時代が設定され、その概念が定義されたことで韓半島先史時代の体系が定立されたと言っても過言ではない。彼と歩調をあわせて研究を進めた鄭白雲、黄基徳、金用珩たちの成果も無視できないが、青銅器時代の設定過程については都宥浩の論説のみでも十分に把握できる。

当時、大多数の学者たちがそうであったが、都宥浩もやはり特定の時代とその文化は特徴的物質文化要素の集合として定義できると考えていた。そして、彼にとって青銅器時代は青銅器を生産・使用したが、まだ鉄器が登場していない時代を意味するものであった。考古学調査を通して把握される「一定形態上の特性を持つ遺物の分布定型」を彼は「文化綜態」と呼び、それを「ある一つの文化の様々な要素を総合してみた全般的な姿」と定義している(都宥浩 1960: 52)。彼が青銅器時代の文化を定義する際も同様の前提に基づいていた。彼は層序-共伴関係を通して文化要素の組合せを把握しつつ青銅器時代を定義していったが、興味深い点は彼が巨石文化の要素をその出発点としたという事実である。

彼は1959年に巨石文化に対する専論も執筆しているが(都宥浩 1959)、青銅器時代設定の妥当性を論じた以前の論考(都宥浩・黄基徳 1957; 都宥浩 1958)においても支石墓とともに共伴遺物を中心に青銅器時代の文化様相を叙述した。支石墓で共伴するとしたコマ形土器、磨製石剣と石鏃、そして各種磨製石器類の組合せに焦点を合わせたのである。このような論旨を展開するようになったのは、鉄器と青銅器が共伴する細形銅剣-土壙

墓出土遺物の組合せと分離させるという意図があったためではないかと考える。つまり、日帝強占期に提唱された金石併用期に統合されてきた支石墓・細形銅剣・鉄器・土壙墓・灰色土器・無文土器などを分離させて、青銅器時代と鉄器時代を別々に定義しようとする意味で支石墓出土遺物の組合せに焦点を合わせたと考えられる。

支石墓出土遺物の組合せが青銅器時代の遺物の組合せでなければならない理由について、都宥浩をはじめとする北朝鮮の学界は大きく三つの根拠を示した。第一、磨製石剣と石鏃は明らかに金属器を模倣したものであることから金属使用の時期とするのが妥当である。第二、金灘里遺跡の青銅器文化層から出土した青銅鏃、江界豊龍洞遺跡出土の青銅釘、沙里院上梅里遺跡石棺出土の青銅鏃などの事例から、大量には生産されていなかったものの金灘里遺跡のように青銅器の生産が生活用具にまでおよんでいた(都宥浩 1958; 金用珩 1958)。第三、韓半島の初期金属器遺物(細形銅剣・鉄器遺物群)が中原の青銅器とは異なり、量的にも質的にも豊富であるため古い時期からすでに長期間にわたって独自の金属を使用した時期があったのであろう(鄭白雲 1957; 黄基徳 1958)。

当時、北朝鮮の考古学者にとって青銅器時代の設定は、ただ単に先史時代の文化史編年体系を作り上げるだけでなく、それ以上の意味を持った作業であった。つまり、ヨーロッパや旧大陸の一般的な先史時代体系と同じ発展段階を設定することで、日帝強占期の考古学者が後進的で他律的な変化を見せたと考えた先史時代の体系から脱皮しようとしたのである。そして、新石器-青銅器-鉄器時代という三時代区分を定義することで民族の歴史を普遍的発展法則によって説明できる枠組

みを構築しようとしたと考えられる。実際に1950年代から60年代初めにかけて北朝鮮の考古学者たちがかなり高い水準の調査を基に青銅器時代の物質的様相を把握して体系的に文化様相を定義したことは事実である。しかし、彼らの究極的な研究目標、つまり唯物史観による人類史的發展概念を適用させて歴史を説明する作業については、むしろ徹底していなかったと評価せざるをえない(李基星2011)。

都宥浩自身の学問的成長背景があったからかも知れないが、彼は文化系統の叙述に多くの努力を傾けており、先史時代社会の性格についてはさほど関心が高くなかった。支石墓社会を青銅器時代としながらも特別な考察を行わず無階級の酋長が治める社会と定義している(都宥浩1959:55)。もちろん今みると、社会の性格に対する彼の考えと叙述は妥当なものであるが、当時の社会主義考古学者のように人類史的發展の一段階として青銅器時代の一般的性格を注意深く検討しなかった。ユーラシアの先史時代について該博な知識を有していた彼であったが、都宥浩はヨーロッパ青銅器時代の社会の性格と韓半島青銅器時代のそれを適切に比較することはできなかった。彼がそのような試みを徹底して行っていれば、北朝鮮で学問的陳述の自由がある程度保障されていた1950年代末から60年代初めには青銅器時代の設定を留保していたかも知れない。

大韓民国(以下、韓国)の学界は北朝鮮考古学の成果を受け入れて青銅器時代を設定した。つまり、私たちが普遍的な先史時代体系を用いなければならないと考えたため青銅器時代を定義したのである。韓国の学界で最初に青銅器時代を設定して韓国先史文化を三時代体系によって叙述した金元龍(1964:255)

は次のように述べている。

現在、青銅器時代遺跡とはコマ形土器、半月形石刀、そして細形銅剣ではない銅製品が出土する一連の遺跡を指し、咸北会寧五洞・羅津草島、平北江界公貴里、義州美松里(上層)、平南勝湖郡金灘里、黄海道鳳山郡智塔里(上層)などがまさにこれに該当する。我々はこのような生活遺跡が本当に青銅器時代のものなのかそうではないのかを知る術がなく、この青銅器文化説をそのまま受け入れなければならないのかそうではないのかを自信を持って決定できない状況であるが..(略)..したがって、この青銅器時代というものがたとえ一部で鉄を知っていたとしても極めて初期に該当する時代と感じられ、この時期に青銅器時代という名称を与えることは差し支えないと考えるが。

1960年代まで出土地の確かな琵琶形銅剣遺物群は極めて少なかった。細形銅剣以前の時期に属すると判断される資料は大部分が日帝強占期に収集され国立博物館に保管されていたもので、1970年代初めまで5~6例に過ぎなかった(尹武炳1966,1972)。当時においても細形銅剣遺物群は鉄器使用時期のものと考えられていたため、その以前の段階の青銅遺物群を見つけ出し別途定義しなければならなかった。細形銅剣は琵琶形銅剣から発展してあらわれた後期型式であることが論証されて以来(尹武炳1966)、琵琶形銅剣遺物群の内容を把握し、それと無文土器が時間的にどのように重なるのかという問題が解明されなければならなかった。琵琶形銅剣遺物群と関わる収集保管資料と遼西地方の発掘品な

どが紹介され (金元龍 1961, 1974, 1976; 韓炳三 1968)、ついに松菊里遺跡で磨製石器と共伴した一括遺物が発掘された (金永培・安承周 1975)。

琵琶形銅剣遺物群の発見事例が増えるとともに青銅器時代の設定に関する根拠は補強されていった。周知の通り、琵琶形銅剣遺物群は遼西地方から韓半島南部まで広範囲な分布を見せる。当然、この遺物群の時空間的範疇化が行われたうえで韓半島青銅器時代の時間的位置も把握できるだろう。しかし、1970年代においても型式分類を経て遺物複合体を把握する研究は少なく、系統論的解釈が支配的であった。特に直接的な関連が少ない南部シベリアの青銅器と比較されることもあったが (金貞培 1971; 金廷鶴 1972)、これは日帝強占期以来の根深い北方文化論の系統論から脱することができなかつたためである。都宥浩によって紀元前7～3世紀と推定された青銅器時代の年代 (都宥浩 1958) を韓国の学界でもおおそ受け入れる傾向であったが、南部シベリアの青銅器編年に合わせて紀元前10世紀まで遡らせる意見もあった (金貞培 1971)。しかし、型式学的分析を基に遺物複合体を認識しようとする努力 (尹武炳 1972) や中原青銅器との共伴関係を根拠に上限年代を提示した研究がなかつたわけではない (全榮来 1977)。このような検討を通して韓国の学界でも1970年代末になると青銅器時代の時間的位置と遺物複合体の輪郭が捉えられるようになった。

ちょうどこの頃から時代の設定とその概念に対する疑問が提起されはじめる。全世界のなかでごく一部の地域でのみ適用できる三時代体系を受容して、具体的な歴史的過程を敢えて一元的な変化に単純化させる必要があるのかという問題提起があった (金貞培

1979)。しかし、最も頻繁に指摘されていた問題は土器、青銅器、鉄器のように特定の時代を代表する物質文化要素の交替および変化の時期が一致しないという点であった。したがって、土器群の変化を基準にするのが適切であるという時代区分法 (西谷正 1982) や土器-鉄器の組合せ様相の変化を基準にして名称もそのようにしようという時代区分体系が提案された (盧熾真 1987)。

その後、青銅器時代における物質文化あるいは社会文化の様相を根本的に再考させる青銅器が発掘によってあらわれる。青銅器時代の新たな物質文化の様相が本格的にあらわれはじめたのは1980年代後半に入ってからである。救済発掘 (訳者注: 日本での行政発掘) が制度化されて大規模全面発掘が可能になると、これまで把握できなかった新たな物質文化の様相が知られるようになった。象徴的区画施設であり防御施設でもある環濠 (裴徳煥 2007; 李盛周 1998)、大規模に接続した区画墓 (李相吉 1993, 1996)、相当な規模に開墾された耕作地、政治的人口再配置によって誕生したと考えられる拠点的な集落などが検出されはじめたのである。

このような変動はどのように触発されたのか? このような変化を通して青銅器時代社会をどのように理解するのか? という問題がこの頃から本格的に挙論されはじめた。1990年代の考古学的成果を基に青銅器時代の開始とそれ以後の変動を新たに理解しようとする視角が提示された。つまり、青銅器時代を理解するためには農耕社会の成立過程に注目しなければならないという意見が安在皓 (2000) によって出された。安在皓 (2000) は青銅器時代が青銅器の使用によって始まったのではなく、農耕集落の移住定着から始まったという点を明確にし、現在では多くの共感を得て

いる。

最近、青銅器時代という時代名称そのものが持つ問題点を明快に指摘した崔鍾圭(2011: 98～99)はこの時代に起こった変動の本質を次のように説明する。

…(筆者注: この)時代は青銅器が社会変革の主体ではなかった。青銅器が社会を変革させたり動かした時代ではない。無文土器社会を先行社会である櫛目文土器社会と区分する特徴は、彼らの道具および遺跡の立地などを見れば農業そのものに重点を置いた本格的かつ専門的な農耕であったことは誰も否定できないだろう。

つまり、青銅器時代の開始とともに登場する最も顕著な物質的様相は、新たな形態の定着農耕集落であるという話である。そして、その後進行する社会文化変動をリードしていったのも農業であったというのである。

京畿道地域の集落および生計経済の資料を分析し、韓半島の青銅器時代に起こった変化が本質的に何を意味するかについて申叔静(2001: 24～25)は次のように要約する。

時間の経過によって作物栽培が本格化－集中化するなかで、次第に農耕文化システムが構築されていったのであろう。集落全体はそのような目的に組み込まれていったのであり、そのなかで環濠－木柵施設も現われたのであろう。..(略)..このシステム内部は財産の私有と階層化という動機によって連続的な文化変動が起こり、それは幾度も増幅されていったのであろう。

つまり、青銅器時代の間に作物栽培が本格

化し、韓半島諸地域の社会集団は農業共同体としての物質的様相と社会文化システムをさらに複雑に発展させていったという意味である。

以上で筆者は解放直後、韓国先史時代体系を再編成しようとする熱意に満ちていた北朝鮮の考古学者によって青銅器時代が設定される過程について検討した。彼らはまず、青銅器が最も豊富であった細形銅剣の時期は鉄器時代であり、青銅器時代はそれ以前に属するはずであるという判断を下したとみられる。細形銅剣以前の時期は支石墓築造期であり、共伴する遺物は青銅器ではなく磨製石剣などであった。しかし、青銅器が皆無だったというわけではなく、当時としては金灘里遺跡出土の青銅鑿や遼寧地方の琵琶形銅剣遺物群がその例として挙げられた。そこで磨製石剣は銅剣を模倣して製作されたものである等の根拠を提示して支石墓の時期を青銅器時代に設定した。以後、韓国の学界でもこの説が受け入れられるようになったが、現在では支石墓築造時期に該当する遺構で出土した青銅器あるいはその破片がかなりの数に達する。それでも青銅器を中心に青銅器時代が設定されなかったという点、そして青銅器時代が始まってから相当な期間青銅器が見られないという点も時代設定に問題提起せざるを得ない状況にしている。重要な事実は、青銅器時代の開始期にエリートたちが青銅器の鑄造を主導して墳墓や埋納遺構を構築して大量に奉献する現象が決して見られないという点である。むしろ90年代以後、全面発掘調査で確認される青銅器時代開始期の様相は川沿いの沖積台地上の住居址群で見られ、これは新たな形式の農業共同体の登場を物語っていると考えられる。

2. 青銅器の拡散・受容： グローバルな過程の部分

ここでは青銅器について検討してみよう。この時代の韓半島内に分布する青銅器の性格を理解するためには、筆者は青銅器が持つ二つの側面を決して見逃してはならないと考える。一つ目は青銅器生産技術の受容は全世界的な拡散の歴史過程の一部であるという点。二つ目はその地域の経済的、社会理念的脈絡によって青銅器の生産と利用の方式が決まるという点である。

人類で最初に自然銅を叩いたり熱処理して銅製品を製作した地域はメソポタミア北部とトルコ南東部一帯であり、その時期が紀元前8千年紀まで遡るため、この地域が金属使用の起源地とされる (Maddin et al.1999;Ozdogan and Ozgodan 1999)。この地域を越えて最初に鉱山が開発されて銅製品の生産が活発に行われた地域はヨーロッパ東南部である。その時期は紀元前5千年紀前半からとされるが (Muhly 1988;Jovanovic 1988)、散発的に釣り針や銅丸などが発見されはじめるのは紀元前6千年紀からである (Tringham and Kristic1990)。これより若干新しい時期で銅製品の生産が活発に行われた場所はイベリア半島であり (Ruiz-Taboada and Montero-Ruiz 1999;Lillios 2004)、紀元前4千年紀になると全ヨーロッパで銅製品が見られる。紀元前4千年紀に初期金属文化期に含まれる地域はヨーロッパを中心にして東方に拡散するが、ウラル山脈南側まで含めて中央アジア西部とインダス川流域まで拡張する (Chernykh 1992)。そして、紀元前2千年紀になると旧大陸の外れとアフリカ大陸を除いたほぼすべての地域に金属器の生産技術が拡散していく。

東アジアで金属を利用しはじめた時期はユーラシア西側地域よりも新しい。中原地域での断片的な銅製品の発見は仰韶文化期まで遡るが、これを金属利用段階と評価することは難しく、銅小品が時折発見される段階は龍山文化期と把握される。中原地域で多様な青銅器が鑄造されるのは二里头文化期であり、その時期は放射性炭素年代で紀元前2090～1680年と知られている (杜酒松 2000:20～28)。しかし、中原とその周辺地域の中で最も古い時期に青銅遺物群があらわれるのは新石器中・末期の甘粛地域である。馬家窯文化と馬廠類型期から青銅刀といった遺物が見られはじめ、齐家文化期にいたって出土例が急増するが、その時期は紀元前2500～2000年に該当し二里头文化期より早い。齐家文化の青銅遺物群には銅刀と銅斧、装飾具として使われた小型銅製品と銅鏡などが含まれ、鉛あるいは錫が合金されたものもあり、ヒ素合金の銅製品も存在する (Mei,J.2000; 孫淑雲・韓汝玢 1997;Sun, S. et al.2000)。この地域の早期青銅器はおそらく「ユーラシアンステップベルト」3期の東端に該当するいわゆるセイマ＝トゥルビノ (Seima-Turbino) 文化と接触して登場したものであるという解釈 (ChernyKh1992, 2009;Mei,J.2009) が説得力を持つ。ところで、この齐家文化期の青銅刀子や装飾銅板、陶器などの一部は二里头文化と深い関連性を持っているため、両地域の青銅文化の交流が十分に推測され、甘粛地域の青銅文化は中原地域の早期青銅器文化の成立に重要な影響を与えたという (李水成 2005;Fitzgerald-Huber,1995;Liu, L.2012:322～349)。

中原地域に青銅器鑄造技術が定着した後、長江流域でも青銅器製作が行われた紀元前1400～1300年頃には南部広東地域で

も砂岩製合范と簡単な青銅道具が登場する (Higham1996: 75 ~ 135)。東南アジア一円に青銅器鑄造技術が初出することと関連して注目しなければならない遺跡がタイの Ban Chiang と Ban Non Wat 遺跡である。ここは墳墓遺跡であり新石器時代の遺構と切り合い関係を見せるが、砂岩製合范と銅鋸・銅斧が出土する遺構が確認され、古いものは紀元前 1100 年代まで遡る (Higham et. At.2011;Higham2014: 137)。したがって、紀元前 2 千年紀が終わる直前までには東アジア北部と南部地域の端まで青銅器生産技術が拡散していった。このような点から見ると、紀元前 1 千年紀になって青銅遺物が流入したり青銅器鑄造が試みられる韓半島は青銅器生産の辺境地域になるわけである。

紀元前 7000 年から 2000 年まで近東とユーラシア西部一帯では青銅器生産の技術的發展とともに生産技術の地域的拡大が絶えず続いた。自然銅を叩く簡単な加工法から銅鉱石を溶かして鑄造する技術に發展し、合金技術が登場してヒ素が混ざった青銅器を製作して、ほどなく錫が合金された青銅器を生産するに至ったのである。数千年にわたって大陸的な範囲で青銅器製作の技術的發展と地域的な拡散が進行したわけである。ゴードン・チャイルドに代表されるが、20 世紀前半の考古学者たちがすでにこのグローバルな過程に関心を傾けて説明しようとした。チャイルドが特に注目した問題として、一つは技術の發展が社会的な發展にいかなる役割を担ったのかに対する説明 (Childe1958)、もう一つは地域的拡散という現象を伝播、移住、交易などの過程のうちどれで説明するのか (Childe1963: 38 ~ 52) という二点が挙げられよう。

しかし、地球上の互いに異なる地域で、互いに異なる人間集団が偶然に金属を経験で

き、それで何らかの製作を試みる可能性はいくらでもある。例えば、歴史的に旧大陸との接触があったとは見なし難いインカ地域でも青銅器生産技術は相当な水準に發展した。インカ地域では青銅器製錬・合金のほぼすべての技術が開発され、さらには銅-銀、銅-金の合金技術も開発されたという (Lechtman1988)。このように複雑に発達した工程の中には金属の展性を極大化させ非常に薄い板状の装身具を作るために開発されたものがあり、象徴性を持った独特な色相を出す技術が開発され、身分と権力、宗教的理念を表象して誇示するためにも用いられた (Lechtman1993: 250 ~ 255)。私たちが金属という材質に対して重要視するのは堅固さ、強靱さ、鋭さといった実用道具に必要な性質であるが、インカ人たちが金属から感じた魅力は全く異なったものであったといえる。

効率的に道具を利用するために金属技術が開発され、金属器が製作されたという前提では世界の諸地域における初期金属器の出現を説明できない。したがって、20 世紀中ばからは多くの考古学者が土着人の伝統的な冶金作業について民族誌考古学の観点から研究してきた。これらの研究は考古資料の解釈にも大きな影響を与えることとなり、例えば、1970 年代初めのマイケル・ローランズの論文がその代表的なものではないかと考えられる。ローランズは金属器製作のための原料の獲得、製錬、製品加工、交易と関わる伝統的概念、専門化、職人の身分と活動方式、交易と使用に関する体系的な批判と再構成を提示している (Rowlands 1971)。冶金に関する民族誌考古学の研究が生産と分配、そして消費と関わる活動と組織に対する知識のみを私たちに与えたのではない。これまで金属器の生産と交易に対して持っていた私たちの観念

自体を大きく変化させた。特に、民族誌考古学の研究は原料の産地、採鉱、燃料準備、製錬、製作、交換、消費と関わる土着人の知識と行為が社会的、そして象徴的観念を媒介に複雑かつ繊細に絡み合っているという点を考古学者に悟らせてくれた。

現代考古学では単に金属器の製作のみならず他の物品の生産と関わる技術が文化的、理念的な表象の手段であり、物質文化の生産と分配、消費と廃棄・埋納と行為が社会的あるいは象徴的意味として構築されているという研究観念が広く普及している (Lechtman 1977; Appadurai 1986; Pfaffenberger 1986, 1990; Lemmonier 1992; 李盛周 2014)。このような観点に基づいて考古金属学者であるオッタウェイは「冶金術の循環 (Metallurgical Cycle)」という図式を提示している (Ottaway 2001)。この図式はある銅製品が一つの社会内で生産の工程を経て社会に分配されて使用とリサイクル、あるいは奉獻される、そして廃棄や埋納されたものが考古学調査を経て現われるようになる、物質文化の一代記のような過程の中でいかなる価値と象徴性を有して作用するのかに注意しなければならないと提案する (Ottaway and Roberts 2008)。

実際、金属器製作技術はグローバルな歴史的過程を経て旧大陸の諸地域集団が受容したのである。もちろん、交通と通信の手段が原始的であった先史時代の過程を今日のそれと比較することはできない。先史時代には数千年かかった過程であるため、その開始と終焉に対する解釈に困難はあろうが、結果をみればユーラシアの一方で始まった金属器製作が東端まで拡散して全世界的現象としてあらわれたことは事実である。したがって、このグローバルな拡散と受容の過程を叙述していく作業は重要である。これとともに特定地域が

青銅器時代に入る過程を理解することも重要である。しかし、私たちがさらに重要視しなければならない問題は、諸地域の集団が金属生産技術をどのように選択的に受容して、どのような金属器を製作・利用したのかということであり、これは諸地域の社会的・理念的脈絡から解き明かさなければならない最も重要な問題ではないかと考える。韓半島青銅器時代の性格に対する妥当な理解のためにはこの時期の青銅遺物群を通して私たちはこの二つの側面の問題を解明しなければならないのである。

以前と比べると青銅遺物の調査資料は近年大きく増加している。しかし、青銅器の生産と受容がこの時代の社会文化変動を導いていったといえるほどの証拠はまだ確認されていない。周知の通り、青銅器が主に発見される時期は中期に該当する松菊里文化期であり、この時期を代表する青銅器は琵琶形銅剣である。韓半島に最初に流入した琵琶形銅剣は遼寧地域の初期型式であり、これらは韓半島内で製作された可能性が高く (李栄文 1991, 2002)、または韓半島産青銅原料を用いて製作された可能性も提起されている (崔炷 1996)。しかし、琵琶形銅剣の流入は松菊里文化の形成とは関係なく起こったことである (姜仁旭 2005)。また、琵琶形銅剣をはじめとした初期青銅器遺物の流入も一地域での発展が総体的に拡散したのではなく、個別的で断片的な文化要素として流入したという指摘 (朴洋辰 2002) がある。琵琶形銅剣遺物群の一部が韓半島内で製作されたとしてもそれが出土する脈絡から見ると、松菊里文化期に青銅器生産が持続的に増加し誇示的に使用された証拠は全く見出だせない。この段階の琵琶形銅剣は大量製作・供給されたのではなく、限定された物品を再加工・再使用する例

が多いことからみて武器形石製品とは別の扱われ方をされておらず(姜仁旭 2010)、社会的階層化を積極的に反映しているとは見なし難いという指摘(尹昊弼 2000)は妥当である。つまり、琵琶形銅剣は一定時期に遼寧地方からある相互作用のネットワークに沿って多量入手されて分配されたものではないかと推測される。そのネットワークが以後の時期まで発展的に維持されず追加流入がなくなり、当初には高い価値と魅力を有していたが、一部は奉獻されて、また一部は相当な期間伝世されながら凋落していったのではないかと考える。破損品が再加工される時にはすでに青銅器が有していた本来の価値と象徴性もかなり低下してしまった状態であったのであろう。

青銅器時代であれば青銅器が流通した時代ではなく、青銅器の生産と使用が社会文化変動とリンクしていた時代でなければならない。なによりも自主的な青銅器生産は時代定義の第一要件であり、自主的な生産を通して独自の型式が開発されることは十分に予想されることである。ユーラシアにおける青銅器文化の拡散と分布を分析したチュルヌイフは東部ヨーロッパから中国北辺まで広域に分布する青銅遺物群を多くの地域圏(province)に区分しているが、地域圏が類別される理由は銅鉱山を中心に少なくとも一つ以上の生産拠点があるためである(Chernykh 1992)。これは自主的に生産が行われない独自の青銅遺物群の分布圏は想定しがたく、それに基づいて青銅器時代を定義することも難しいという意味である。

私たちが普遍性を持つ旧大陸の先史時代の体系に沿って時代区分を行い、それを概念化したとすれば、ヨーロッパにおける青銅器時代の設定を参考するに必要がある。Helle Vandkilde は青銅器時代を、青銅が一つの材

料として標準価値を持った魅力的で有用な物品としてエリートの経済的な権力の主要基盤となる時代と見た。エリートが権力を維持するため、次第に青銅器生産に集中するようになって社会的、象徴的、文化的、経済的資本として社会的実践に利用するようになるというのである(Vankilde 2007)。

いずれせよ、青銅器はヨーロッパでも実用品として消費されるのではなく、スベン・ハンセンが「過ぎた誇示」と概念化したようにエリートの葬送儀礼を通して墳墓に副葬されたり神に奉獻する儀礼の過程で埋納遺構に大量に捧げられた(Hansen 2002)。このような儀礼を遂行するために首長たちが青銅器生産に没頭するようになり採鉱、鑄造、加工、交易に投資することで経済的権力を確保して儀礼的实践を通して政治的、理念的権力も維持できるようになるというのである。実際、紀元前 1800 年に編年されるスカンジナビアのガレモゼ(Gallemose)湿地埋納遺構のような場所で多量の青銅遺物が出土したにもかかわらず、この遺跡は青銅器時代に含まれず新石器時代に編年される(Vandkilde 1996)。この青銅遺物が中部ヨーロッパから輸入されたものであるという点から上記のように判断したのである。周知の通り、金属はヨーロッパでは新石器時代後期に生産・流通された。その中で東南部ヨーロッパといった一部地域では相当量流通したにもかかわらず、新石器時代後期の利器と見ている(Renfrew 1979: 137~174)。その理由は金属の生産が社会変動を推し進めたというよりはコリン・レンフリーも指摘しているように、すでに位階化した社会に価値財として採択されただけ(Renfrew 1986)であるからである。

松菊里文化期のある時点で青銅器製作技術が流入して青銅器の生産と使用が行われたと

しても完形の琵琶形銅剣が墳墓で一点ずつでも出土する事例はさほど多くない。儀礼の過程で断片的に埋納されたり、あるいは破損して象徴的価値が低下した状態で低い水準の奉献という脈絡で発見されるだけである。青銅器の器種が多様に開発されず、象徴性を持つ文様が表現された事例もほぼ見いだせない。青銅器生産の伝統が維持される過程で芸術的技術が発揮されていないうえに、大量製作され複数副葬が行われたり埋納遺構に大量奉献される事例も決して見ることができない。松菊里文化期の間、青銅器の生産と使用が社会文化変動と結びつきながら変化していく様相を私たちは全く確認することができないのである。生産技術が導入されたとしても自主的に青銅器を大量製作して一社会の物質的な様相が大きく変わっていったとは言い難い。青銅器の利用にこの時期の社会文化発展と関連する点が認められるとしても、決してその変化を導いたとは言い難いようである。

ユーラシア大陸における諸地域の青銅器生産と使用は、大陸の一方で始まり長期間かつ広域に進んだグローバルな拡散・受容過程の結果である。20世紀半ばの考古学者もこの点に着目して移住、伝播、交易など拡散のメカニズムを解き明かそうとした。しかし、青銅器の拡散と受容は諸地域の特殊な社会文化的、理念的脈絡においてなされる。したがって、その地域特有の青銅器生産技術の導入と展開過程を検討することになるが、これは各地域の文化の変動と社会発展を理解するうえで重要である。このような二つの側面に着眼して韓半島の青銅遺物群を調べてみると、韓半島は旧大陸の中でも青銅器が最も新しい段階に導入された地域の一つであるという事が分かる。そして、韓半島の青銅器時代には青銅器生産の一般的な体系が受容・定着せず、

輸入された青銅器や自主鑄造した青銅器が幾らかあるとは言っても、社会の中心的な理念体系の中で象徴的意味を持って活用されたものと見なし難い点は事実である。

3. 変動の脈絡とリズム： 後期先史時代の圧縮的变化

新石器時代から青銅器時代への転機を説明してきた研究の問題点を指摘しながら申叔静は今後の研究では次のような点に留意しなければならないという提案を行った。

その一つが現在の国境を念頭に置いて研究の空間的範囲を定めてはならず、広域の地理的な様相を考慮して文化の分布様相に留意しなければならないという指摘であった。そして、もう一つは私たちにとって関心を引く地域の文化のみに焦点を合わせず、北東アジア広域の文化単位とそれらの間の関係について理解しようとする努力が必要であるという提案である(申叔静 1998: 19-22)。これまで韓国の学界でも北東アジア地域の文化集団間の関係について関心を持っていた。ややもすると日帝強占期から現在にいたるまで繰り返される系統論的解釈がそのような関心の結果であるのかも知れない。この系統論的な研究では韓半島の物質文化の変動を解釈する際、北方からの影響、集団移住などを想定してきた。文化変動の説明というより系統の追跡のような作業であったが(李盛周 2008,2011)、意図的に先史文化の系統を中原地域でなく北方に設定してきた(李盛周 2014)。つまり、韓半島先史文化の系統と民族文化の基柱を組み合わせる作業であり、東北アジア広域の先史文化を体系化しようという作業ではなかった。

したがって、系統論的な研究において東北

アジア先史文化の時空間的体系化といった作業が試みられることはほぼ無かった。しかし最近、このような観点から脱皮して東北アジア青銅器時代文化単位の定義と関係網の形成に関する専門的研究が発表されている(呉江原 2006, 2012, 2013)。青銅器時代の東北アジア一円に分布していたいくつかの文化単位、そしてそれらの間の相互作用とその歴史的過程に対する研究(呉江原 2004, 2006, 2012)に関心が移っていったのである。考古学者たちはこの時代の文化単位が種族集団、あるいは政治体といかなる関係があるのかという問題に多くの関心を傾けたが、実際は先史時代の民族文化の範疇と起源、そして古朝鮮のような民族政治体の形成に対する探求という研究アジェンダが依然として有効であり、考古学それ自体の質問から始まった関心ではなかった。いずれにせよ、後期先史時代以前の地域集団は生態的環境に適応していた小規模採集集団であり、この集団の分布によって共通した文化領域が発現したのであろう。しかし、青銅器時代からは政治的な勢力化を進めていった集団も登場するようになるが、さらに重要な事実は中原地域を中心に周商社会の古代国家が成立して、この中原文明が周辺に膨張しながら周辺の低い水準の階級社会と交渉するようになる歴史的脈絡の変化である。このような文明中心地と周辺社会の相互作用を通して(李盛周 1996)歴史時代の支配理念と象徴なども周辺社会に拡散・受容されるにいたる。いくつかの地域文化の分布と、中心地と周辺という相互作用の脈絡を排除したまま青銅器時代韓半島の社会文化変動を理解することはほぼ不可能に近いであろう。

韓半島と遼東の青銅器時代開始期は商文明の成立と一見、無関係なように見えるかも知れないが、実はそうではないと考える。例え

ば、ヨーロッパ大陸においてその東南部から青銅器時代へ移行しはじめることは、メソポタミア地域で文明化が進んで国家社会が登場することと関係がある。紀元前4千年紀後半、メソポタミア地域で古代国家が成立すると、その文明がその核心地帯を脱して貿易ディアスポラや殖民拠点を設置しながら周辺地域の開発と交易に着手する様相を見せる(Stein 1999, 2005)。その余波によって、これよりやや新しく地中海東部のエーゲ島嶼地域にも複合社会が成立して国際的理念が登場するが、これはメソポタミア北部とレバント地域との相互作用を通して可能であったのであろう(Renfrew 1972: 451 ~ 455)。このような変化は連鎖的にバルカン半島一円のヨーロッパ東南部地域を文明の周辺地域に作り上げ、この地域の社会システムにも明瞭な変化をもたらすのである(Heyd 2013)。そして、変化の直接的な影響がまだ到達していない地中海西部と北部、中部ヨーロッパ一帯ではいわゆるピーカー文化が地域集団間の活発な交流のネットワークによって拡散していた(Czebreszuk 2004; Vander Linden 2006; Fokkens and Nicolis 2012)。これが青銅器時代に入る直前に該当する紀元前3000年紀中半、ヨーロッパに構築された広域の政治社会システムといえる。メソポタミア文明が成立するとともに小アジアとレバントなど地中海東部地域がその周辺地帯になって、エーゲ島嶼地域の都市化はヨーロッパ東南部の社会変動を促進させた。この地理的な体系を背景に物資の開発と交易が拡張され理念と象徴性も流通した。特に文明の支配理念が物質化される方式と象徴性がエーゲ地域を経てヨーロッパ大陸に拡散する過程は、青銅器時代の中部と北西部ヨーロッパが複合社会に発展していく過程を理解するうえで非常に重要に扱われ

る (Kristiansen and Larson 2005)。

東北アジア地域でも商代文明の登場は、その周辺にあたる遼西・遼中北・遼南地域で夏家店下層文化、高台山文化、双砬子文化など新たな農耕文化集団が形成されることとの関係が考えられ、韓半島西北部に最初の青銅遺物が流入するもの、このような文化集団およびその関係網の形成と関係があるだろう (王巍 1993)。韓半島青銅器時代の起源を説明する際、常に私たちは初期無文土器を中国東北地方の土器遺物群と比較する方法 (朴淳彦 2003; 裴真晟 2003; 千羨幸 2005, 2013; 金在胤 2010) でアプローチする。さきほど述べたように青銅器時代の始まりが新たな農耕集団によって耕作地を占有するため居住領域が拡大していったことと関連するのであれば、この時代の開始期に起こった農耕集団の移住過程を考えてみる必要がある。刻目突帯文土器段階の集落は例外なく川沿いの沖積地に沿って立地する (安在皓 2000)。川に沿って内陸深くまで進出しながらも沖積台地という限定された地形を決して脱しない。新石器時代集落の立地変動を考慮した場合、韓半島の大河川の1次あるいは2次支流の沖積層は前・中期以後長期間占有されなかった地形である。周知の通り、新石器時代末期の土器はおおよそ海岸沿いの丘陵や貝塚で採集される。この点を考慮すれば刻目突帯文土器集団は森で覆われていた河岸の沖積台地を占有しながら拡散したのであろう。新石器時代末期の共同体の占有地とは互いに衝突を起こさないので政治的葛藤 (金杜錫 2009) は少ないか無かったのであろう。

以後、青銅器時代前期と中期の過程は継続的な占有地域の拡大とそこから推論できる人口の増加で説明できるだろう。嶺南地方の資料をみても前期から中期になると集落の数と

規模が拡大する現象が見られるため人口の継続的な増加を想定できるとし、それゆえ集落の様相が分化して専門化する過程が明確であるとする (金権九 2005: 145-178)。特に、青銅器時代前期から中期の松菊里文化期への移行では物質文化の様相において重大な変化が見られる。もちろん、中期の物質文化の中には前期の後半に既に原初的な形態を見せるものもあるが、中期になると全般的な変化が増大されて深化する。最も顕著な変化は大規模集落の形成であろうが、おそらく経済的あるいは政治・理念的決定によって人口が再配置された結果と理解できる (李盛周 2012)。松菊里遺跡や大坪里遺跡のような大規模集落は環濠と木柵で囲まれており、他の集落では見られない生産施設が共存し、共同体的儀礼を通して構築された墳墓遺跡が隣近に存在する。つまり、この時期に集落類型の全般的な転移がなされたわけである (安在皓 2004; 李亨源 2009)。

目に見える物質の様相の変化を越えて社会構造化の変動、理念的価値の創造、新たな社会アイデンティティの構築と再編、集団と集団あるいは集団と個人に対する観念の変化を想定しなければならず (金鍾一 2011; 禹延延 2010, 2012; マーティン・T・ベール 2014)、これは今後我々が粘り強く模索して行かなければならない質問であると考えられる。一方、人口が増加して農耕集落が発展する過程で農耕定着民は住居を定めて耕作地を開墾し、長期間その場所に住むようになる。したがって、住居とそれを取り巻く景観に対して以前とは異なる観念を持つようになる (李盛周 2012)。特に自分の根拠地と関連した縁故の観念、あるいは空間に対する歴史的観念を持つようになる。このような観念は集落の近い場所に記念物的な墳墓を築造して

先祖の埋葬儀礼を繰り返しながら再確認したのであろう。李相吉が指摘したように、変化した世界観は空間に対する観念を付与するようになり、それに基に儀礼を繰り返すことで我々を取り巻く景観に物質的な様相を作り出すようになる(李相吉 2000:196~202)。

このように観念的フレームに重大な変化が起こり、それによって繰り返された物質的な実践によって青銅器時代中期にはそれ以前のどの時期よりも多くの遺構と遺物が蓄積されることになった。しかし、青銅器時代中期は短期間に過ぎない。長く見積もっても400年を超えないだろうし、青銅器時代早期と前期を合わせた時間帯も500年程度に過ぎない。そうであれば農耕に全面的に依存した集落が拡散して定着しながら記念物的な墳墓が築造される時点までの時間は500年余りの期間に過ぎない。景観と時間に対する観念が維持されて記念物が持続的に築造され儀礼が反復されていった時期も300~400年に過ぎない。この期間の中で青銅遺物が流入して使用され、埋納され今日まで考古資料として残った。東北アジア、その中でも遼東と韓半島は定着農耕集落の拡散から記念物の築造、金属の流通にいたるまでが800~900年間に過ぎない非常に圧縮的な変動過程を見せた。このような歴史的過程については、農耕集落の拡散が自然的な境界や気候条件のため遅く進行した点、中原文明の形成時点が相対的に遅い点、近東とヨーロッパより船舶、車、航路と道路の利用が発達していなかった点、そして文明と周辺社会のネットワークがさほど緊密に組織されていなかった点等様々な理由を想定できるだろう。ところで、後期先史時代の開始はかなり遅滞した一方、文明地域に成立した帝国が周辺社会の歴史に直接介入する時点は東洋・西洋で類似しており、東北アジア周辺

社会の後期先史時代は相対的に短く、変動は圧縮的にならざるを得なかったようである。

おわりに

以上で韓半島の青銅器時代はいかなる時代であったのかについて論じた。これを要約すれば、第一に韓半島青銅器時代は青銅器の生産と使用によって触発されたものではなかった。新たな農業共同体の小規模定住集落がそれまで長期間にわたって人々が居住しなかった沖積地を開墾して占有していくことから青銅器時代が始まった。第二、それ以後も青銅器の生産と使用が文化変動を導いていったのではなく、農業共同体の人口増加と集落類型の変動、景観とその利用方式の変化などが察せられるのみである。青銅器はこのような変化に対し非常に部分的あるいは補助的に利用されただけである。第三、韓半島における重要な文化変動はユーラシア大陸でのグローバルな変動の一部として理解されなければならず、特に金属器の使用も同様であるといえる。そのような意味で韓半島はその地理的な条件のため、青銅器の流入と使用が最も遅れた地域の一つとなる。第四、近東の文明が拡散して周辺地域が文明との相互作用を通して変化を経験したように、遼東と韓半島一円の後期先史時代も商・周文明の出現と拡散の影響を直・間接的に受けるようになる。韓半島一円に刻目突帯文土器の農業共同体が拡散することも、金属器の最初の流入も中原地域における古代国家の出現および拡散と緊密に連動しているのである。第五、遼東と韓半島の後期先史時代では農業依存度が高い村落共同体の登場から拠点集落の登場、記念物の築造、青銅器の使用といった変化が800~900年という短い期間内に圧縮的に進んだ。

李盛周 (Lee song ju : 大韓民国 国立慶北
大学校考古人類学科教授)

引用参考文献 (カナダラ順)

- 姜仁旭 2004 「韓半島出土動物形帯鉤の系統
に対する試論的検討」『湖南考古学報』
19 湖南考古学会
- 姜仁旭 2005 「韓半島出土琵琶形銅劍の登場
と地域性について」『韓国上古史学報』
49 韓国上古史学会
- 姜仁旭 2009 「紀元前 13 ～ 9 世紀カラスク青
銅器の東進と遼東・韓半島の初期青銅器
文化」『湖西考古学』21 湖西考古学会
- 姜仁旭 2010 「琵琶形銅劍の韓国内流入過程
について」『遼寧地域青銅器文化の展開
と韓半島』第 4 回韓国青銅器学会学術大
会 韓国考古学会
- 郭大順・張星徳 (金ジョンヨル訳) 2008 『東
北文化と幽燕文明』上・下 東北アジア
歴史財団
- 金権九 2005 『青銅器時代嶺南地域の農耕社
会』学研文化社
- 金永培・安承周 1975 「扶余松菊里遼寧式銅
劍出土石棺墓」『百濟文化』7・8 公州大
学校百濟文化研究所
- 金用珩 1958 「金石併用期と関連して」『文化
遺産』1958-1 科学院出版社
- 金元龍 1961 「十二台營子の青銅短劍墓」『歴
史学報』16 歴史学会
- 金元龍 1964 「韓国文化の考古学的研究」『韓
国民族文化史体系 (I) 民族・国家史』
高麗大学校民族文化研究所
- 金元龍 1973 『韓国考古学概説 初版』一志社
- 金元龍 1974 「伝茂州出土遼寧式銅劍につい
て」『震檀学報』38 震檀学会
- 金元龍 1976 「瀋陽鄭家窪子青銅時代墓と副

葬品」『東洋学』6 檀国大学校東洋学研
究所

- 金壯錫 2002 「南韓地域新石器 - 青銅器時代
轉換: 資料の再検討を通じた仮説の提示」
『韓国考古学報』48 韓国考古学会
- 金壯錫 2009 「農耕社会への轉換に対する理
解」安承模・李俊禎編 『先史農耕研究の
新たな動向』社会評論
- 金在胤 2010 「遼東初期青銅器文化の形成と
韓半島無文土器の起源」『遼寧地域青銅
器文化の展開と韓半島』第 4 回韓国青銅
器学会学術大会 韓国考古学会
- 金ジョンヨル 2009 「「望ましい」過去 - 中国
考古学と民族主義」『東アジアの考古学
研究とナショナリズム』第 52 回全国歴
史学大会考古学部発表資料集 韓国考古
学会
- 金貞培 1971 「韓国青銅器文化の史的考察」『韓
国史研究』6 韓国史研究会
- 金貞培 1979 「韓国考古学の時代区分の問題」
『韓国学報』14 一志社
- 金廷鶴 1972 「青銅器文化の源流と発展」『韓
国の考古学』河出書房
- 金鍾一 2011 「韓国先史時代の女性と女性性」
『韓国考古学報』78 韓国考古学会
- 盧赫眞 1987 「時代区分に対する一見解」『三
佛金元龍教授停年退任紀念論叢 - 考古学
編 -』一志社
- 都宥浩 1958 「朝鮮原始文化の年代推定のため
の試み」『文化遺産』1958-2 科学院出
版社
- 都宥浩 1959 「朝鮮巨石文化研究」『文化遺産』
1959-2 科学院出版社
- 都宥浩 1960 『朝鮮原始考古学』科学院出版
社
- 都宥浩・黄基徳 1957 「智塔里遺跡発掘中間
報告」『文化遺産』1957-6 科学院出版社

- マーティン・T・ベール 2014 「経済だけではない」『韓国考古学の新天地』韓国考古学会
- 朴淳発 2003 「漢沙里類型形成考」『湖西考古学』9 湖西考古学会
- 朴淳発 2004 「遼寧粘土帶土器文化の韓半島定着過程」『錦江考古』1 忠清文化財研究院
- 朴洋震 2002 「韓半島における青銅器出現過程」韓国上古史学会編『転換期の考古学 I』学研文化社
- 裴徳煥 2007 「青銅器時代環濠聚落の展開様相」『石堂論叢』59 東亜大学校石堂学術院
- 裴眞晟 2003 「無文土器の成立と系統」『嶺南考古学』32 湖南考古学会
- 申淑静 1998 「韓国新石器－青銅器時代の転換過程について」『ソウル大学校博物館年報』10 ソウル大学校博物館
- 申淑静 2001 「我が国青銅器時代の生業経済－京畿道を中心にした試論－」『韓国上古史学報』35 韓国上古史学会
- 安在皓 2000 「韓国農耕社会の成立」『韓国考古学報』43 韓国考古学会
- 安在皓 2004 「中西部地域無文土器時代中期聚落の様相」『韓国上古史学報』45 韓国上古史学会
- 呉江原 2004 「遼寧地域の青銅器・初期鉄器時代複合社会の形成と社会変動」『先史と古代』8 韓国古代学会
- 呉江原 2004 「中国東北地方3つの青銅短剣文化の文化地形と交渉関係」『先史と古代』20 韓国古代学会
- 呉江原 2006 『琵琶形銅剣文化と遼寧地域の青銅器文化』清溪
- 呉江原 2012 「東北アジアの中の韓国青銅器文化圏と複合社会の出現」『東洋学』檀国大学校東洋学研究所
- 禹延延 2010 「錦江中下流松菊里型墳墓の象徴構造に対する脈絡的考察」『扶余松菊里遺跡からみた韓国青銅器時代社会』第38回韓国上古史学会学術発表大会 韓国上古史学会
- 禹延延 2012 「錦江中流域松菊里文化段階社会の威信構造に対する試論的考察」『韓国考古学報』84 韓国考古学会
- 尹武炳 1966 「韓国青銅短剣の型式分類」『震檀学報』29・31 震檀学会
- 尹武炳 1972 「韓国青銅遺物の研究」『白山学報』12 白山学会
- 尹昊弼 2000 「銅剣墓と被葬者の性格に関する研究」慶南大学校大学院硕士学位論文
- 李基星 2010 「日帝強占期「金石併用期」に対する一考察」『韓国上古史学報』68 韓国上古史学会
- 李基星 2011 「初期北韓考古学の新石器・青銅器時代区分」『湖西考古学』25 湖西考古学会
- 李相吉 1993 「昌原徳川里遺跡発掘調査報告」『三韓社会と考古学』第17回韓国考古学全国大会発表要旨 韓国考古学会
- 李相吉 1996 「青銅器時代墳墓に対する一視角」『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』論叢刊行委員会
- 李相吉 2000 『青銅器時代の儀礼に関する考古学的研究』大邱暁星カトリック大学校博士学位論文
- 李盛周 1998 「韓国の環濠聚落」『環濠集落と農耕社会の形成』嶺南・九州考古学会第3回合同考古学大会発表要旨 嶺南考古学会・九州考古学会
- 李盛周 2008 「型式論と系統論」崔夢龍編『21世紀の韓国考古学 I』周留城出版社
- 李盛周 2011 「巨視的観点から見た東北亜社

- 会文化体系の変動』『東北亜歴史論叢』
33 東北アジア歴史財団
- 李盛周 2012 「儀礼、記念物そして個人墓の
発展』『湖西考古学』26 湖西考古学会
- 李盛周 2014 「『北方文化論』について』『神
話の歴史化：反省と批判のための新たな
進展』第41回韓国上古史学会学術発表
大会 韓国上古史学会
- 李栄文 1991 「韓半島出土琵琶形銅劍形式分
類試論』『博物館紀要』7 檀国大学校中
央博物館
- 李栄文 2002 『韓国支石墓社会研究』学研文
化社
- 李亨源 2009 『青銅器時代集落構造と社会組
織』書景文化社
- 全栄来 1977 「韓国青銅器文化の系譜と編年』
『全北遺蹟調査報告』7 全州市立博物館
- 鄭白雲 1958 「解放後我が国の考古学の発展』
『文化遺産』1958-4 科学院出版社
- 千羨幸 2005 「韓半島突帯文土器の形成と展
開』『韓国考古学報』57 韓国考古学会
- 千羨幸 2015 「韓半島早・前期無文土器と中
国東北地域』『中国東北地域と韓半島南
部の交流』第22回嶺南考古学会学術発
表会 嶺南考古学会
- 崔炷 1996 「茎に挟りがある琵琶形銅劍およ
び琵琶形銅鐙の国産について』『先史と
古代』7 韓国古代学会
- 崔鍾圭 2011 「韓国における青銅器時代とい
う用語の適用について』『考古学探究』
10 考古学研究会
- 黄基徳 1958 「朝鮮青銅器使用期の存否に関
して』『文化遺産』1958-1
- 孫淑雲・韓汝玢 1997 「甘肅早期銅器的発現
與冶鍊・製造技術研究』『文物』7 文物
出版社
- 王巍 1993 「夏商周時期遼東半島和朝鮮半島
西北部的考古学文化序列及相互關係』『中
国考古学論叢：中国社会科学院考古学研
究所建所40年紀念』科学出版社
- 李水成 2005 「西北與中原早期冶銅業的区域
特征及相互作用』『考古学報』3 中国科
学院
- 任式楠 2003 「中国史前銅器綜述』『中国史前
考古学研究』陝西省博物館・陝西省考古
研究所・西安半坡博物館
- 西谷正 1982 「朝鮮考古学の時代区分につい
て』『考古学論考』平凡社
- Alberti, M. E., and Sabatini, S., 2013, Intro-
duction: Transcultural Interaction and
Local Transformations in Europe, In
Alberti, M. E. and Sabatini, S. (eds)
Exchange Networks and Local Trans-
formations, Oxford: Oxbow Books.
- Anfinset, N. and Wrigglesworth, M. (eds),
2012, Local Societies in Bronze age
Northern Europe, Sheffield: Equinox.
- Appadurai, A. (ed), 1986, The Social Life
of Things: Commodities in Cultural
Perspective, Cambridge: Cambridge
University Press
- Bradley, R., 2012, Hoards and the deposition
of metalwork, in Fokkens H. and A.
Harding (eds), The European Bronze
Age, Oxford: Oxford University Press.
- Chernykh, E. N., 1992, Ancient Metallurgy
in the USSR, Cambridge: Cambridge
University Press.
- _____, 2009, Formation of
the Eurasian steppe belt culture, in
Hanks, B. K. and K. M. Linduff (eds),
The Social Complexity in Prehistoric
Eurasia: Monuments, Metals, and
Mobility, Cambridge: Cambridge

- University Press.
- Childe, V. G., 1958, *The Prehistory of European Society*, London : Pelican.
- _____, 1963, *The Bronze Age*, New York : Biblio and Tannen (1930, Cambridge : Cambridge University Press) .
- Cornell, p. and Fahlander, F. (eds) , 2008, *Encounters/Materialities/Confrontations : Archaeologies of Social Space and Interaction*, Newcastle : Cambridge Scholars Publishing.
- Czebreszuk, J. (ed) , 2014, *Similar But Different : Bell Beakers in Europe*, Leiden : Sidestone Press.
- Fitzgerald-Huber, L. G., 1995, *Qijia and Erlitou : The Question of Contacts with Distant Cultures*, *Early China* 20.
- Fokkens, H. and F., Nicolis (eds) , 2012, *Background to Beakers*, Leiden : Sidestone Press.
- Folkenhausen, L., 1995, *The regionalist paradigm in Chinese archaeology*, In Kohl P. L. and Fawcett, C. (eds) , *Nationalism, Politics and The Practice of Archaeology*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Gimbutas, M., 1977, *The First Wave of Eurasian Steppe pastoralists into Copper Age Europe*, *Journal of Indo-European Studies* 5.
- Hanks, B. K. and K. M. Linduff (eds) , 2009, *The Social Complexity in Prehistoric Eurasia : Monuments, Metals, and Mobility*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Hansen, S., 2002, 'Uberaustattungen' in grabern und horten der fruhbronzezeit, In Muller, J. (ed) , *Vom Endneolithikum zur Fruhbronzezeit : Muster Sozialen Wandels? Universtatsforschngen* zur Prahistorischen Archaeologie Band 90, Bonn : Dr. Rudolf Habelt GmbH.
- Harding, A. F., 2000, *European Societies in the Bronze Age*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Heyd, V., 2012, *Europe 2500 to 2200 BC : between expiring ideologies and emerging complexity*, in Fokkens H. and A. Harding (eds) , *The European Bronze Age*, Oxford : Oxford University Press.
- Higham, C. F. W., 1996, *The Bronze Age of Southeast Asia*, Cambridge : Cambridge University Press.
- _____, 2014, *Early Mainland Southeast Asia : From First Humans to Angkor*, Bangkok : River Books.
- Higham, C. F. W., Ciarla, R. Higham, T. F. G. Kijngam, A. and Rispoli F., 2011, *The establishment of the Bronze Age in Southeast Asia*, *Journal of World Prehistory* 24 (4) .
- Jovanovic, B., 1988, *Early metallurgy in Yugoslavia*, in Maddin, R. (ed) , *The Beginning of the Use of Metals and Alloys*, Cambridge, Massachusetts : MIT Press.
- Kristiansen, K., 1987, *From stone to bronze — the evolution of the social complexity in Northern Europe*, in Brumfiel, E. M. and T. K. Earle (eds) , *Specialization, Exchange, and Complex*

- Societies, Cambridge : Cambridge University Press.
- Kristiansen, K. and Larsson, T. B., 2005, *The Rise of Bronze Age Society : travels, Transmission and Transformations*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Lechtman, H., 1977 *Style in Technology : Some Early Thought*, In Lechtman, H. and Merrill, R. S. (eds) *Material Culture : Style, Organization, and Dynamics of Thought*, St. Paul Minnesota : West Publishing.
- _____, 1988, *Traditions and styles in Central Andean metalworking*, in Maddin, R. (ed) , *The Beginning of the Use of Metals and Alloys*, Cambridge, Massachusetts : MIT Press.
- _____, 1993, *Technologies of power*, in Henderson, J. S. and P. J. Netherly (eds) , *Configurations of Power : Holistic Anthropology in Theory and Practice*, Ithaca : Cornell University Press.
- Lemonnier, P., 1992 *Elements for and Anthropology of Technology*, *Anthropological Papers*, Museum of Anthropology No.88, Ann Arbor : University of Michigan.
- Lillios, K. T., 2004, *Late Neolithic/Copper Age Iberia*, in Bogucki, P. and P. J. Crabtree (eds) , *Ancient Europe 8000 B.C. - A. D. 1000*, Farmington Hills : Thomson Gale.
- Liu, Li, and Chen, X., 2012, *The Archaeology of China : From the Late Paleolithic to the Early Bronze Age*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Maddin, R., J. Muhly, and T. Stech, 1999, in *The Beginning of Metallurgy*, Hauptmann, E. Pernicka, T. Rehren, and U. Yalcin (eds) , Bochum : Deutsches Bergbau Museum.
- Mei, Jianjun, 2000, *Copper and Bronze Metallurgy in Late Prehistoric Xinjiang*, BAR international series, Oxford.
- _____, 2009, *Early metallurgy and socio-cultural complexity : Archaeological discoveries in the Northwest China*, in Hanks, B. K. and K. M. Linduff (eds) , *The Social Complexity in Prehistoric Eurasia : Monuments, Metals, and Mobility*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Muhly, J. D., 1988, *The beginnings of metallurgy in the Old World*, in Maddin, R. (ed) , *The Beginning of the Use of Metals and Alloys*, Cambridge, Massachusetts : MIT Press.
- Ottaway, B. S. and Roberts, B., 2008, *The emergence of metalworking*, in Jones, A. (ed) , *Prehistoric Europe : Theory and Practice*, Malden : Wiley-Blackwell, pp.193-22.
- Ottaway, B. S., 2001, *Innovation, production and specialization in early prehistoric copper metallurgy*, *European Journal of Archaeology*4 (1) .
- Ozdogan, M. and M. Ozgodan, 1999, *Archaeological evidence on the on the early metallurgy at CayonuTepesi*, in *The Beginning of Metallurgy*, Hauptmann, E. Pernicka, T. Rehren, and U. Yalcin

- (eds) , Bochum : Deutsches Bergbau Museum.
- Pauketat, T. R., 2001, Practice and History in Archaeology : An Emerging Paradigm, Anthropological Theory 1.
- Pearce, M., 2000, Metals make the world go round : The Copper supply for Fratesina, In Pare, C. F. E. (ed) , Metals Make the World Go Round : the Supply and Circulation of Metals in Bronze Age Europe, Oxford : Oxbow Books.
- Pfaffenberger, B., 1992, Social anthropology of technology, Annual Review of Anthropology.
- Renfrew, C., 1972, The Emergence of Civilization : The Cyclades and the Aegean in the Third Millennium B.C., London : Methuen.
- _____, 1979, Problems in European Prehistory, Edinburgh : Edinburgh University Press.
- _____, 1986, Varna and the emergence of wealth in prehistoric Europe, Appadurai, A. (ed) The Social Life of Things : Commodities in Cultural Perspective, Cambridge : Cambridge University Press.
- _____, 1987, Archaeology and Language : the Puzzle of Indo-European Origins, Cambridge : Cambridge University Press.
- Rowlands, M. J., 1971, The archaeological interpretation of prehistoric metalworking, World Archaeology 3 (2).
- Ruiz-Taboada, A. and I. Montero-Ruiz, 1999, The Oldest Metallurgy in Western Europe, Antiquity 73.
- Stein, G. J., 1999, Rethinking World-System : Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia, Tucson : The University Arizona Press.
- _____, 2005, Introduction : The comparative archaeology of colonial encounters, In Stein, G. J. (ed) , The Archaeology of Colonial Encounters, Santa Fe : School of American Research Press.
- Sun, Shuyun and Rubin Han, 2000, A study of casting and manufacturing techniques of early copper and bronze artifacts found in Gansu, In Linduff, K., Han Rubin, and Sun Shuyun (eds) , The Beginnings of Metallurgy in China, New York : The Edwin Mellen Press.
- Tringham, R., and Kristic, D. (eds) , 1990, A Neolithic Village in Yugoslavia, Los Angeles : UCLA press.
- Vander Linden, M., 2006, Le Phenomene Campaniforme : Synthese et Nouvelles Perspectives, British Archaeological Reports (International Series) 1470, Oxford : Archaeopress.
- Vandkilde, H., 1996, From Stone to Bronze : The Metalwork of Late Neolithic and Earliest Bronze Age in Denmark, Aarhus; Aarhus University Press.
- _____, 2007, Culture and Change in Central European Prehistory, Aarhus; Aarhus University Press.
- (原文 : 李盛周 2015 「韓国青銅器時代の性格に対するいくつかの論議」『牛行李相吉教授追慕論文集』李相吉教授追慕論文集刊行委員会 pp.416-443)